

Title	イスラーム「聖者」概念再考への一考察：マリ共和国ジェンネのalfaを事例に
Author(s)	伊東, 未来
Citation	年報人間科学. 2009, 30, p. 83-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12362
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

イスラーム「聖者」概念再考への一考察——マリ共和国ジェンネの *alfa* を事例に

伊東 未来

要旨

イスラーム世界の各地には、神から授けられた特別な力をもつと考えられている人々が存在する。地域によって呼称の異なるこうした人々は、これまでのイスラーム研究で「聖者 (*saint*)」と呼ばれてきた。「聖者」はその敬虔さゆえに神から恩寵を授けられていると考えられ、人々は彼らを信仰したりその墓を参詣したりする。「聖者」という語はもともと、キリスト教において、中央の権威から「列聖」によって公式に承認された人々を指す語である。この語を、イスラームの諸社会に差異を無視して用いることの妥当性が、イスラーム研究において議論されてきた。本論では、これまでのイスラーム研究における「聖者」概念の妥当性を、西アフリカのイスラーム学術都市ジェンネのローカルな文脈に即して検討する。

ジェンネには *alfa* と呼ばれる特別な力をもつと考えられている人々がいる。*alfa* の活動はコーラン学校の教師、葉やお守りづくり、ト占、人生儀礼の祈祷など多岐にわたり、住民の日常生活に欠かせない役割を担う。こうした *alfa* の役割は、従来の研究から導き出される「聖者」のそれと一致する部分をも

ちながらも、より日常的で「現世的」である。

alfa とそうでない者を分けるのは、聖俗の区分ではなく、「よきムスリムである」ことの相対的な程度の差である。ジェンネの *alfa* の位置づけは、これまでの研究で「聖者」と呼ばれてきた人々をそうたらしめるローカルな文脈を、より詳細に検討していくことの重要性を示唆している。

キーワード

イスラーム、聖者、西アフリカ、マリ、ジェンネ

1 はじめに

イスラームは一般的に厳格な一神教と理解されがちである。しかし実際には、世界のさまざまな場所に伝播し根づいていくなかで、その土地の人々の伝統的な信仰や慣習、政治的イデオロギーを包摂し、多様なかたちで人々に生かされてきた [Geertz 1968, Martin ed. 1982]。そうしたイスラームの多様なあり方のひとつとして、イスラームの「聖者」への信仰実践が挙げられよう。

イスラームの宗教書などで論じられる場合、「聖なる存在」とみなされる人々を指す言葉として、「ワリー (wali)」が一般的である。この言葉はクルアーンにも見られ、ここでは「信仰者の友」(二章二五七節)、「アッラーの友」(一〇章六二節)などと訳される、「由緒正しい」言葉である^[1] [大塚 1989:85]。しかし、イスラーム世界の各地でこうした聖なる存在の人々は、それぞれに異なる語で呼ばれている。たとえばペルシア語圏ではビール (pir)、アラブ世界ではシャイフ (shaykh) やサイイド (sayyid)、シーディー (sidi)、また北アフリカ・マグレブ地方では、アラビア語の murābiṭ から転じたマラーブ (marabout)、東アフリカではファキー (faqī) と呼ばれる。

イスラーム研究において、こうしたイスラーム世界各地でみられる聖なる存在とみなされる人々を総称するのに、saint という語が用いられてきた。日本語では「聖人」「聖者」と訳される。これは、イスラームの「聖なる存在」とみなされている人々を、キリスト教に

おける聖者 saint にならって呼んでいるのである [ターナー 1994:88]。キリスト教における聖者は、「教皇による列聖という公式の手続き」をもって権威に承認されることで聖者となる [ibid.:91]。

イスラーム世界で「聖なる存在」と認識されている人々をさすのに、こうした背景をもつキリスト教における聖者 (saint) の語を用いることに対して、これまでさまざまな異論が提示されてきた。先のターナーは、「集約的で複雑で厳格な列聖の手続きは、キリスト教徒による聖人の資格の理解にとっては決定的なもの」であり、「こうした集権的な教會的機構はイスラームに存在しないので、マラーブ・ティズム (ここではイスラームの「聖者信仰」の意) についての公式または同種の用語法はない」と断言する [ibid.:95、括弧内伊東]。また、モロッコのイスラームを研究する堀内は、「植民地時代を通じて蓄積され、のちにアメリカにも受け継がれた英仏の社会的・

人類学的研究業績の多くが、イスラーム世界で参詣行動の対象となる人物を、その属性や脈絡にかかわりなく、無造作に Saint と呼び慣わしてきた」ことから生じる問題を以下のように指摘する [堀内 1999:320]。ひとつ目は、これまでターナーら西欧の研究者も指摘している、saint という語がカトリック世界で担ってきた含意が、宗教的背景を異にするイスラーム世界の事象に投影される危険性である。ふたつ目は、saint という語が指し示す人物群の範囲にかかわるものである。堀内が調査するモロッコに限定しただけでも、saint として扱われるのは著名な神秘主義者、イスラーム学術都市で活躍したイスラーム学者、名前すら知られていない路傍の小さなお堂に祀られ

た者、預言者の子孫など、多種多様であるという。また、ある特定の人物がフリーなのかシャイフなのかなど、それを信仰する人々のあいだにも見解の違いがみられる。こうした背景も社会的脈絡もさまざまな人々を、その多様性や当事者内の見解の違いを無視してひとつの語に一括してしまうことに、合理的な説明の根拠は見出せない [ibid.:320-323]。

イスラーム世界のあちこちの異なる地域で「聖なる存在」とみなされ、それぞれの呼称で認識されている人々を一括して「saint」「聖者」と呼ぶことの妥当性を、ローカルな文脈にそくして検討する必要がある。

2 これまでのイスラーム研究における「聖者」像

イスラームのさまざまな「聖なる存在」を「聖者」と称することの妥当性が問題視されている。しかし、これまでのイスラームにかんする社会学的・人類学的研究が「聖者」という呼称のもとにさまざまな存在を一括してきたのは、(すくなくとも調査者の視点からみると)同じ言葉で称することも可能に思われるなんらかの共通点がある。そうした人々のなかに見出せたからであろう。たとえば鷹木はチュニジアの事例で、数多く祀られている村の聖なる存在のなかには「学者や神秘家であった人物ばかりでなく、・・・氏族の始祖、遊牧民出身の聖者、木や石など自然と結びついた聖者、さらに異教徒のユダヤ教徒などまでが含まれている」とその多様性を具体的に指摘しな

がらも、彼らを「聖者」という語であらわしている[鷹木 2000:193]。イスラーム「聖者」という語の妥当性を再検討する前に、こうしたこれまでのイスラーム研究で「聖者」と呼ばれてきた人々にある共通性を明らかにしておきたい。

冒頭に述べたように、イスラームの宗教書などで論じられる場合、「聖なる存在」とみなされる人々は「フリー (wālī)」と呼ばれるのが一般的である。コーランにも見られるこの語が、ムスリムにとって観念的なものにとどまらず現実の生活や実践に重要な影響力を与えるようになるのは、八世紀後半にイラクで発生したといわれるスーフィーによるところが大きい。

スーフィーはもともとアラビア語で羊毛を意味する²⁰に由来する。羊毛を身にまとう者、つまり粗末な衣をまとい、清貧で敬虔な生活を送る者 (sūfī) を指した。今日ではこの語に英語の *fan* をつけスーフィズムとも呼ばれる。スーフィズムは八世紀後半から九世紀初頭のイラクで、スンナ派の形式化・律法主義への批判として興った運動で、当初は一部のウラマー (ulama、イスラーム学者) が主な担い手であった。「アッラーへの神秘的な愛」を強調し、修行を通じて自己とアッラーとの「消融」をめざすスーフィズムは、その後、現世利己的な傾向を強めながら、次第に都市の民衆へと広がっていった [Schimmel 1975; ニコルソン 1980]。

民衆に広まったスーフィズムでは、熱心な修行の末に「消融」を得た修行者や奇蹟的な所業をなす者が、そこに集う人々の指導者の存在となり、人々は彼らを wālī (聖者) とみなしたのである (ニコ

ルソン 1980:127〕。中国やインド、エジプト、北アフリカなどイスラーム世界の各地にみられる聖者や聖者信仰のすべてが、かならずしもスーフイズムと関係があるわけではないことに留意しなくてはならないが〔赤堀 2005:8〕、聖者や聖者信仰の民族誌的研究が、スーフイズムの運動や教団が根づいている地域を対象としてさかんにおこなわれてきたことは事実である。

初期のスーフイズムの聖者の来歴や奇蹟譚を紹介した著作は、二〇世紀はじめのものを中心に数多く存在する〔e.g. Smith 1928〕。これらの著作は、彼らが生きた当時（八世紀から一〇世紀頃）のアラビア語史料をもとに、初期の聖者信仰における聖者の様子を描き出している。その後二〇世紀前半のイスラーム聖者研究は、とくにフランスで、その植民地であった北アフリカ・マグリブ諸国の聖者信仰を研究したものがさかんになされた〔Douté 1900, LeTouneau 1954〕。聖者信仰を「正統的イスラーム」から外れた「部族 (tribes) のイスラーム」「イスラームのカルト」⁽²⁾〔Douté 1990:2-3〕と捉えるという、のちに批判される視点を通じてではあるが、「聖者」と呼ばれる人々の来歴などが紹介されている。

一九六八年、ギアツはモロッコとインドネシアというふたつの場所におけるイスラームの実態を、それぞれのローカル・コンテクストと歴史的展開に着目して比較考察した〔Geertz 1968〕。これは聖者信仰を中心に扱った研究ではないが、この研究でおこなわれた、地域によって異なるイスラームのあり方を具体的な事例をもとに描き出していく試みは、その後もさまざまな地域を対象としてなされ

ていった〔e.g. Eickelman 1976, Martin ed. 1982, Munson 1993〕。こうしたローカル・コンテクストに着目したイスラーム研究の広がりのおかげで、社会的・歴史的文脈に応じてさまざまな形態をとるイスラーム (islams) のひとつのあり方として聖者信仰を捉えようとする民族誌的研究が、一九八〇年代以降さかんになされるようになった。

アジアの聖者信仰についていえば、インドにおけるイスラーム聖者の実践を、他宗教と混淆しつつ展開する「民衆宗教」のひとつのかたちとしてとらえた加賀谷の研究がある〔加賀谷 1982〕。Van der Veer は、インドネシア・グジャラート州のある村において、イスラーム聖者 (pu) が複数の異なるムスリムの集団やヒンドゥー教徒からも信仰され、それぞれの立場にとって異なる意味が付与されていることを報告している〔Van der Veer 1992〕。

聖者信仰の研究がさかんな北アフリカについて言えば、たとえばチュニジアのジェリッド地方セタダ村で調査をおこなった鷹木は、村のイスラーム化や国家の歴史と照らしあわせながら、人々のあいだに伝わる聖者の奇蹟譚や聖者廟参詣の様子を描いている〔鷹木 2000〕。また、大塚はエジプトの聖者廟に参詣する人々が何を祈願しているのかなどを詳細に示し、こうした実践をイスラームにおける「異端」や「迷信」、「セクト運動」とみなしてきた解釈〔Lane 1978, Turner 1974, ウイルソン 1972〕ではなく、行為者（聖者信仰をする人々）の「主観的な」理由づけから理解することの必要性を論じた〔大塚 1989, 第四章〕。堀内は、聖廟の「観光」化などを含むモロッコにおける聖者信仰の複合性を、聖者の聖性の歴史的系譜によって

跡づけている「堀内 1985」。また、人々が廟に祀られる聖者などのように「コミュニケーション」しているのかを、聖者に病氣治癒を祈願する彼らの発話や身体的動きに着目して論じるモロッコの事例研究もなされている [Akhnisse 2009]。

こうした変遷をたどるイスラームの聖者を扱った研究から、地域的・歴史的なヴァリエーションのなかにも共通する「聖者像」を抜き出していく。それを簡潔にまとめると、以下ようになる。まず、(1) 彼らは過酷な修行経験や信仰実践の敬虔さゆえに、アッラーから恩寵(バラカ)を付与されている。(2) 恩寵が与えられていることを証明するのは、難病の治癒や未来の予言など、他の者には成しえない奇蹟的な所業である。(3) その聖者のもとには、彼とのかかわりを通じてアッラーの恩寵を受けられると考える人々がやってきて、アッラーへの「とりなし」を願う。(4) 多くの場合、聖者がアッラーから授けられた恩寵はその持ち物や墓などに宿り、人々に力を与えると考えられている⁽³⁾。

3 ジェンネ Galfa⁽⁴⁾

2節で概観した先行研究から導き出される「聖者」像をふまえたうえで、以下ではその妥当性を、西アフリカ・マリ共和国のイスラーム学術都市ジェンネ (Djenné) yalfaと呼ばれる人々の事例をもとに、再検討していきたい。

ジェンネ語⁽⁵⁾の alfa は、アラビア語でイスラーム法学者を意味す

る al-fāqih (アル・ファキーフ) が訛化したものであるという。alfa を他の言語(マリの公用語であるフランス語やイスラームの中心的言語であるアラビア語)に訳す必要がある場合、*saint, marabout, wali* など、いずれもこれまでの聖者研究で「聖者」とされてきた語が用いられる⁽⁶⁾。しかし、ジェンネの alfa あり方は、必ずしもこれまでの聖者研究から導き出された「聖者」のそれとは一致しないように思われる。

alfa の活動の詳細を紹介する前に、alfa が生きるジェンネの町について、そのイスラーム化の歴史を中心に概観しておく。

3・1 ジェンネのイスラーム化

ジェンネは西アフリカの内地部に位置する、マリ共和国中部の都市である。ニジェール川とその支流バニ川の季節的な自然氾濫原が形成する内陸三角州の南端に位置し、町の周囲はバニ川やその分流に囲まれている。面積は一平方キロメートルに満たず、限られた土地に一〇以上のエスニック・グループからなる約一万四千人(二〇〇七年現在)の人々が暮らす。町で唯一のモスクである *jingar bere* (ジンガル・ベル、ジェンネ語で「大モスク」の意)をはじめ、町じゅうの建築物が泥からできており、建築のユニークさとイスラーム学術都市、交易都市としての歴史から、一九八八年にユネスコの世界遺産に登録された。

西アフリカ内陸の重要な交通路であったニジェール川の支流に囲まれ水利がよく、交易品となる穀物や綿花の栽培もさかんであった

「ジェンネは、ふるくから交易の要所でもあった。現在のジェンネから南に約三キロメートル離れたジェンネ・ジェノ (Djené-djenno) ジェンネ語で古ジェンネの意) が町のかつての中心地である。考古学調査によつて、ここには紀元前三世紀から人の集住があり [Es-Sa'di 1964:22, McIntosh and McIntosh 1981:1]、一〇世紀頃には複数の小集落の集合からなる人口一万ていどの町が形成され、農業・漁業・牧畜・交易がおこなわれていたことが明らかになっている [McIntosh and McIntosh 1981]」。

一二世紀ごろ、人々は徐々にジェンネ・ジェノから現在のジェンネへ移動を始めたと考えられている [ibid.:16]。移住の理由は、水流の変化により交通手段である舟の接岸が困難になったからと言われている。もうひとつの可能性として、ジェンネ・ジェノの周囲に多数の割れたテラコッタ像が放置されていることから、イスラーム化した人々が偶像を打ち棄て、新しい土地に移つたという理由も挙げられている [McIntosh 2002]、定かではない。

現在のジェンネの町は一三世紀頃に成立したと考えられている [McIntosh 1981:10]。ジェンネで「最初のイスラーム改宗者」とされる Koi Komboro (コイ・コンボロ、ジェンネ語でコンボロ王の意) がムスリムになったもの頃で [Monteil 1971:38]、改宗にさいして彼は、領土内から「四二〇〇人のイスラーム学者」を招いたという伝承も残されている [ibid.:38]。四二〇〇というのは誇張された数字ではあるが、この伝承から、当時すでに相当数のムスリム知識人がジェンネの周囲に居住もしくは往来していたことが推測されよ

う [Clark 1982:48]。コンボロ王は改宗後に自分の王宮を壊してモスクを建設させ、これがジェンネでの最初のモスクとなった [Monteil 1971:39]。彼は自身が改宗したものの、住民に改宗を強制したり政治体系をイスラームに依拠したものに変更したわけではなく、住民のイスラーム化はその後数世紀をかけて、徐々に展開していった。

ジェンネの住民のイスラーム化がすすむのは、ジェンネがソングアイ帝国の範囲にはいつて、北部の都市トンブクトウとの交易のつながりがより強まる、一四世紀頃のことである。一五世紀にはジェンネはトンブクトウと並んで、多数の学者を擁するイスラーム学術都市として栄えた [Monteil 1971:41-42, Konaré Ba 2002:30-32]。その後、一六世紀末にソングアイ帝国がモロッコの侵攻によつて崩壊すると、ジェンネにもモロッコが任命したカーデー (al-qādī, イスラーム法にのつとつた裁判権・警察権などもつ役人) が派遣され (一五九一年)、ジェンネの王は一定の政治的権限を保ちながら、モロッコの支配下にはいる [Moteil 1971:48]。この頃にはジェンネの住民の多くがムスリムであつたと考えられているが、ジェンネの王はイスラーム法と「慣習法」を合わせた法で住民を統治し [ibid.:53]、住民のイスラームの実践も「周囲の偶像崇拜への信仰などと順化した、ゆるやかなものであつた」と言われている (7) [Es-Sa'di 1964:60]。それまでのジェンネのゆるやかな信仰実践に大きな変化をもたらすジハード (イスラーム聖戦) が起こるのは、一九世紀前半である。ジハードによつてジェンネの北西部にマーシナ帝国を興したセク・アマドゥは、一八三〇年代にジェンネも統治下におさめた [Bâ et

Daget 1962:151-152)。彼は、政治組織や徴税の体系だけでなく、衣服や歌・踊りなどにおいても「厳密な」イスラームの実践を人々に徹底することをめざした [Johnson 1976]。

一九世紀後半から二〇世紀初頭になると、ジェンネを含むニジェール川内陸三角州一帯にも、直接的なフランス植民地支配が及んでくる。ジェンネは一八九三年にフランス植民地政府によって制圧され、一九六〇年の独立までフランス植民地の一部となった。

フィツジャーは、西アフリカにおけるイスラーム化の過程を「隔離」「混合」「改革」の三段階に分けて分析している [Fisher 1973]。彼によると、外部のムスリム商人によってイスラームがもたらされたものの、大多数の民衆はそれと直接的なかわりはずに「隔離」していた段階から、都市部を中心にもともとあった信仰体系や生活様式に適応しながら「混合」する段階を経て、つぎに「より純粋なイスラーム」を求める学者たちによる「改革」の動きが高まる段階に至るといふ [ibid.:36]。

ジェンネにおけるイスラームも、この段階に沿って理解できよう。一三世紀に首長が改宗し、交易のため多数の外來ムスリムの居住・往来があるものの、住民はイスラームに深くかかわりはもたない（「隔離」）。その後徐々に住民のイスラーム化が進んだが、「伝統的」「偶像崇拜的」信仰は続けられ、一五世紀にイスラーム学術都市として内外からの学者・学生を擁するようになったあとも、比較的「ゆるやかな」イスラームの信仰実践がみられる（「混合」）。その後、それにたいして「より純粋な信仰」をもとめる動きが一部の者のなか

で「時限爆弾」 [ibid.:36] のよう蓄積され、反動として「厳格な」イスラームがもたらされた（「改革」）。

ジェンネは町の興り以来、一定の独立を保ちながらも、マリ王国やソンガイ帝国、モロッコやジハード国家など、さまざまな勢力から影響を受けてきた [Monteil 1971]。それぞれの勢力はイスラームへのコミットメントの度合いが異なるため、その変遷は現在のジェンネのイスラームの在り方、*alfa* の役割にも反映されていると考えられよう。

3 - 2 ジェンネ *alfa*

ジェンネでは、モスクからの礼拝の呼びかけをおこなう *mu'adhin*（ムアズズイン）、地域のイスラーム指導者である *imam*（イマーム）といった、いわゆるイスラームの正統的役職者やコーラン学校の教師だけでなく、イスラームと土着の伝統との混淆の度合いがより強いとされるお守りづくり、葉づくり、ト占などの営みをおこなう人々も、*alfa* と称される。特殊な力をもつとされる彼らは、こうした営みを通じて、ジェンネの人々の日々の生活に不可欠な役割を果たしている。

一九九八年に市がおこなった調査によると、ジェンネでは就労人口のうち約一三・三%が、*maraboutage*（マラブタージュ、フランス語の表現で *marabout* の仕事）、つまり「聖者業」に就いているという [DNUH 1998]。土地の肥沃なニジェール川内陸三角州の南端に位置し、交易都市としても栄えてきたジェンネでは、農業・漁業・牧畜・

商業などもさかんである。多くの *alfa* はこうした生業とイスラームにかかわる仕事をかけもちながら生活している。農業・漁業・牧畜・商業などの職業はそれぞれを専業とする *エスニック・グループ* が担っているが、*alfa* にはどの *エスニック・グループ* であつてもなることができる。

3・2・1 *alfa* の種類

地域の宗教的指導者で、大モスクでの礼拝の指揮をつとめる *イマーム* も *alfa* のひとりである。イマームの役職は世襲ではなく、*alfa* や各街区の代表者らが協議したうえで、住民の総意を代表するかたちで *ジェンネ* の *Koyra Kokoi* ⁽⁹⁾ (コイラ・ココイ、*ジェンネ* 語で町の長の意) が任命する。イマームの補佐役やモスクで礼拝の呼びかけをおこなう複数の *ムアッズイン* は、イマームが適任者を選ぶ。こうした「役職者」も、*ジェンネ* に数多くいる *alfa* のひとりである。

しかし、*ジェンネ* の *alfa* の大多数を占めるのは、こうした役職者ではない *alfa* である。*ジェンネ* の *alfa* たちの説明によると、その活動はいくつかの「種類」に区分できる。

まず、*alfa* の活動は「*siri alfa* (シリ・アルファ)」とそうでない *alfa* の二つに分けられる。*siri alfa* は、「秘密 (*siri*)」や「黒い知識 (*bai bibi*)」を用いて人々に薬を処方したりト占をおこなう *alfa* である。後者の「*siri alfa* でない *alfa*」は主にコーラン学校の教師をつとめている者をさす ⁽¹⁰⁾。

3・2・2 コーラン学校の教師としての *alfa*

alfa の主な活動のひとつは、コーラン学校の教師である。*ジェンネ* 語でコーラン学校は *tira lu* (ティラ・フ) と呼ばれている。*tira* とは宗教的なものやその力の宿ったものを意味し、*lu* は家の意である。*ジェンネ* にはコーラン学校が五八校あり、*ジェンネ* の子どもたちの大半が通っている ⁽¹¹⁾。

ジェンネ の子どもたちがコーラン学校に入るのは七歳からで、修了時期は生徒個人々の習熟度によって異なるが、「近代」学校の中学校にあがる前の) 一二歳から一五歳くらいまで通うのが一般的である。*alfa* は早朝からそれぞれの自宅やモスク前の広場などで、二〇人ていどから一〇〇人以上にもなる生徒を集めて、コーランの暗誦と筆記の授業をおこなう。八時すぎにいったん授業は終わり、夕方からまた再開される。

おもに七歳から一〇代半ばの子どもを対象にしたコーラン学校のほかに、コーランの暗誦を修了してさらに上のイスラーム法学やハディースにかんする学問を学ぶ生徒のための高等コーラン学校がある。*ジェンネ* には高等コーラン学校が約一〇校あると言われ、一部の *alfa* (12) でも教えている。高等コーラン学校に通う年齢に制限はなく、「生徒」のなかには一〇代の子どもから、すでに自身もコーラン学校で数十年教えている *alfa* もいる ⁽¹¹⁾。国内外から生徒がやってきて、*alfa* 宅に居候しながら高等コーラン学校で学んでいるという ⁽¹²⁾。

預言者の誕生日を祝うマウールド (生誕祭)、アラビア語ではマウ

リドマウィド)の期間中やラマダーンの月など、ムスリムにとつてとくに神聖で重要なときには、高等コーラン学校を中心にジェンネ中の *alfa* が参加してコーランの詠誦会が開かれる。とくにラマダーンの月には、一ヶ月間の毎夕、盛装した *alfa* たちが代表者の庭先や町の広場に集まって、日が暮れるまで集団で詠誦をおこなう。そしてラマダーン月の二七日目には、高等コーラン学校のうち規模の大きな学校で、*donso* (ドルソ、ジェンネ語で「暗誦」の意) が夜を徹しておこなわれる。ドルソとは、コーラン学校を修了した者がひとりひとりとリレー形式でコーランの暗誦をおこなうセレモニーである。夜の九時ごろから翌三時ごろまでという深夜に行なわれるにもかかわらず、ジェンネの人々は高名な *alfa* のコーランの暗誦を聞くという貴重な機会に立ち会うため、複数のコーラン学校をはしごしてこの行事へ足を運ぶ。

3・2・3 人生儀礼と日常生活における *alfa*

alfa はコーラン学校におけるイスラームの知識の伝達だけでなく、さまざまな人生儀礼においても、その特別な力を人々に分け与えることが求められている。

以下にみる名づけ、割礼、結婚、葬儀といった儀礼に *alfa* は不可欠である。それは儀礼の定まった式次第のなかに *alfa* による祈祷が組み込まれていることから明らかであるが、また、*alfa* へ十分な謝礼を支払えないために儀礼を延期する住民がいることから垣間見える。儀礼で祈祷をするために招かれた *alfa* には、謝礼として金品が渡され

る。定まった額があるわけではなく、物でもよいし、善き *alfa* が困窮者に高額な謝金を要求するのははしたないこととされているので、支払える範囲で渡せばよい。しかし、人々は暗黙の「相場」(たとえば割礼の場合には一万五千セーファ・フランていど⁽¹³⁾)を気にして、それが貯まるまで儀礼を延長しようとする場合さえある。謝礼を十分に払えないから *alfa* の祈祷を抜きにして儀礼を行なおうという考えは人々のなかになく、一九八〇年代に干ばつが続いた時には、準備に必要な他の出費が捻出できないこともあり、割礼や結婚式を適切な時期から先延ばしする家が続出したという⁽¹⁴⁾。

誕生と名づけ

子どもが誕生すると、誕生から七日目の朝に名づけの式がおこなわれる。これがジェンネの人にとって、一生のうちで最初の *alfa* とのかかりと言えよう。名前はすでに親や親族が決めているが、*alfa* から祝福を受けるこの日に、ようやくその名が家族以外の人々にアウンスされる。すでに赤ん坊の名が決まっていなくても、名づけの式より前に口にだして呼ぶことはない。

早朝、赤ん坊の家の前に人々が集まって祝いの食事をしているところに、*alfa* がやってくる。*alfa* は家の前でコーランの一節を唱えた後、赤ん坊の父親と共に子の名を参列者に告げる。赤ん坊は男児女児問わず剃髪して丁寧に洗い清められ、*alfa* の腕にだっこされながら、生まれてはじめての祈祷を受ける。*alfa* はジェンネ語もしくはその子どもにエスニック・グループのことはで、成長の無事のための加護を

アッラーに乞い、最後に自身の唾をふっと軽く赤ん坊に吹きかける。

一〇年から一五年ほど前までは、この名づけの式は *alfa* の家でおこなわれていたが、近年では自分の家でおこなう場合が大半である。

alfa の家でおこなわなくても、命名に *alfa* を招くことは必須である。

命名の式における祈禱は、親やその家族が通ったコーラン学校の教師をつとめる *alfa* や、日ごろから悩みの相談やお守りづくりなどをお願いしている *alfa* に依頼するのが通例である。

また多くの場合、命名の際に *alfa* はお守りを赤ん坊にとりつける。

これはジェンネ語の *tira ije* (テイラ・イジェ、子どものお守りの意) と呼ばれる。 *alfa* が一〇センチ・メートル四方ほどの小さな紙にコーランの一節を書き入れて祈禱をほどこし、それを皮革細工職人のもとの持ち込んで、牛皮の小さな袋に縫いこめてもらう。この袋を数個から数十個連ねたものを、命名の際に *alfa* が赤ん坊の腰まわりにつける。これは赤ん坊を悪い病やジン (イスラームの悪霊) から護るためであり、特にジンからの攻撃を受けやすいと考えられている赤ん坊には不可欠のお守りである。

割礼

ジェンネ語で割礼は *bango* (バンゴ) と呼ばれ、男女ともにおこなわれる。割礼の義務はコーランに記されていないが、ハディースに拠って、男子を中心にイスラーム世界で広く実施されている。女子割礼をおこなうのはイスラームでは必ずしも一般的ではないが、ジェンネでは男女ともに割礼をするのが当然だとされる。割礼は結

婚式と同じくらい重要で盛大におこなわれるべき行事と考えられており、割礼を終えるということは、ひとりの人として認められる準備ができた、ということの意味するという。

割礼が実行される日とその前後の計一五日間、子どもたちは世話役の大人と寝食をともにする。 *alfa* はその初日と最終日に子どもたちが寝食をともにしている家 (*bango hu*、割礼の家) を訪れ、彼らのために祈禱を行なう。 *alfa* はまず、初日に割礼前の青い貫頭衣 (*bango horo derve*、割礼入りの衣) に身を包んだ子どもたちにむかって、彼らが割礼をほどこすことのできる一定の年齢にまで無事に成長したことへの祝いを述べる。つづいて割礼の無事のための祈禱がおこなわれる。 *alfa* はコーランの一節を唱えながら、子どもたちの頭や服、身に着けているお守り、履物のひとつひとつにゆっくりと触れ、唾を吹きかける。最終日にも同様に、 *alfa* による祈禱が行なわれる。

婚姻

近年では結婚相手を本人が選び、それを親や親族に承認してもらうという手順で結婚する夫婦もみられるようになってきたが、多くはこれまでのやり方を踏襲し、息子の結婚相手を父親が選ぶという。その父親と結婚相手の親との仲介をつとめるのが *alfa* である。

息子に合うと思う結婚相手を父親が見つけると、父親は彼自身がお世話になった (そして多くの場合その息子もお世話になった) *alfa* に、相手方の家族との仲介を依頼する。 *alfa* はその依頼を承諾すると、一人で相手方の家へ出向き、父親の意向を伝える。その際に *alfa* は、

父親から託された五千〜一万五千セーフア・フランの現金とコラの
実一〇個〜六〇個を持参する。相手方の父親が承諾すれば、その旨
が申し出た側の父親に伝えられる。その後父親は相手方の家や *alfa*
のもとを何度も訪れ、(子どもがまだ若い場合には) 婚約期間や(近々
結婚する場合には) 式の日どりなどを *alfa* の助言をもとに決める。も
ちろん申し出が断られる場合もあるが、もし最初に息子の父親の意
を相手方に伝えて断られた場合は、*alfa* が何度かその家へ足を運び説
得するという。それでも無理な場合は、その旨を申し出た側の父親
に伝え、ときにはその父親と一緒に息子の結婚相手を選びなおすこ
ともある。

離婚の際にも、*alfa* は仲介をおこなう。離婚に至らないように夫婦
双方から話を聞いて助言をおこなうが、それでも離婚に至ったとき
には、財産分与のほかに夫から妻へ最低限必ず支払わなければなら
ないお金がある。それは *hi jey ama* (ヒージャルマもしくはヒージ
エイ・アルマ、結婚財の意) と呼ばれ、現在は二万セーフア・フラ
ンていどが相場である。離婚の際、ヒージャルマを夫から預かって
妻とその家族へ手渡すのも、*alfa* の役割である。

死と葬儀

人が亡くなったときにその遺体を洗い清めるのは、それが男性で
あれば親族の男性、女性であれば親族の女性である。その際に亡く
なった人の男女を問わず傍らで手助けをするのが、亡くなった人が
生前にお世話になった *alfa* である。遺体が洗い清められると、*alfa* は

親族とともに遺体に清潔な白い綿布を着せ、ござやむしろに包む。

親族や近隣の人々が列をなして遺体運び、親族の男性と *alfa* がそ
の列の先頭につく。家が町のどこにあるかと葬列は必ずジェンネの
大モスクの前を通過し、モスク前の広場で、*alfa* の主導のもと葬儀の
礼拝がおこなわれる。その後葬列はジェンネの町の北はずれにある
墓地に向かい(亡くなったのが子どもの場合は町のなかに複数ある
子ども墓地に向かい)、遺体を埋葬する。その際に墓穴へ降りるのは、
近しい家族と、穴を掘り土をかぶせる役目の大工、そして *alfa* である。

日常生活における *alfa* の役割

ジェンネの *alfa* には「*siri* (シリ、秘密)」を用いて薬づくりやお守
りづくり、ト占をおこなう *siri alfa* も存在する。しかし *siri alfa* だけが
こうした活動をするのではなく、コーラン学校の教師をつとめる *alfa*
も、*siri* を用いた活動をおこなっているのが大半である。そのため、
siri を用いた活動のみをなりわいとしている *alfa* を、他の *alfa* と区別し
て *safali koi alfa* (薬づくりアルファ) と呼ぶ場合もある。

siri をもちいた *alfa* の活動は多岐にわたる。ここでは、ジェンネで
七〇年以上 *siri alfa* として活動し、ジェンネのみならず国内の都市や
村々、隣国からも彼を頼って相談者がやってくるという、九〇歳の
ママドゥ・ニャフォのはなしをもとに記述していく。

彼によると、*siri alfa* の仕事には二種類ある。ひとつは、紙に文字
や模様を描いて将来を占ったり、スーラ(コーランの節)を書いた
紙をもとにお守りを作ったりする「*rastirari* (ラシラーリ)」。もうひ

とつは、「決して紙に書かれることはなく、あたまに入っている黒いことば (chini bibi) や黒い知識 (pai bibi) をもちいておこなう仕事」である。彼のもとに相談にくる「客」は、ジェンネの住民が大半であるが、ジェンネで定期市が開かれる毎週月曜日には、外国をふくめた他所からの客が途切れることなく訪れる。

彼のもとを訪れる人々の相談でもっとも多いのは、「悪しきものに攻撃された」ために心身に問題をかかえた人の治療である。「悪しきもの」とは、ジン (イスラームの悪霊)、cyako (チャルコ、呪術師) や asetan (アセタン、悪魔)、yerko'i ngauri (イエルコイ・ンガール、アツラーを自身から追い出した者の意。つまり呪術師でも悪魔でもないが、ねたみや敵意から神への気持ちすら忘れ、他人を攻撃する者) などである。チャルコに憑かれたために目を充血させて暴れた人にチーニ・ビビ (黒いことば) を唱えてチャルコを追い出したり、アセタンに襲われて心臓の鼓動が感じられないほどに弱った人に薬を処方したりするという。

こうした緊急を要する相談の他にも、不妊に悩む女性や早い出世を願う公務員、好意をいだいている相手と相思相愛になりたい若者、商売がうまくいかない商人、夫婦仲や親族との関係に悩む夫・妻など、さまざまな悩みを抱えた人々がやってくる。siri alfa はそれぞれの悩みに応じて、町の周辺でとれる植物の皮や根からつくった飲み薬やお守り、usuran (ウスラン、ジェンネ語で嗅ぎ薬、お香) を処方したり、ト占や祈祷をおこなう⁽¹⁵⁾。

siri alfa はコーラン学校の教師をつとめる alfa だと異なり、人々への

イスラームの薫陶というよりも、日々の生活で直面する悩みの相談の解決をめざしている。しかしその力は「アツラーのおかげで保たれている」ものであり、たとえ薬の製法や知識を知ってはいいても、それは「アツラーの加護がなければ発揮できないもの」であると説明される。相談におとずれる人々も、彼らのことを alfa と呼んでいる。

4 ジェンネの alfa をつうじた「聖者」概念再考

前節でみたように、ジェンネで「聖者」を意味する alfa と呼ばれる人々の活動は、生活に密着して多岐にわたっている。これがこれまでの聖者信仰や聖者研究から導き出されるイスラーム聖者像とどの点で共通し、どの点で異なっているのかを、1節でみた聖者像と対比させてみていこう。

alfa はジェンネ内外のコーラン学校で子供のころからコーランやイスラームの諸学問を習得した者である。彼らが子供の名づけや割札のさいに招かれて祈祷をおこなうのも、お守りづくりを依頼されるのも、彼らの敬虔さや「よきムスリム」であることでアツラーから授かった恩寵 (バラカ) が、それらを通じて人々に分け与えることが望まれているからである。また alfa は、人々がかかえる心身の悩みに対して薬をつくったり、助言をおこなう。これは主に siri alfa の活動で、これらはその alfa だけの、もしくは alfa terey (アルファであること、terey は英語の hood の意に近い接尾語) の内部だけで知られる siri (秘密) をもとになされる、とされる。

こうしたalfaの活動や人々とのかわり方は、1節でみた聖者像の(1)から(3)、つまり、(1)聖者は過酷な修行経験や信仰実践の敬虔さゆえに、アッラーから恩寵(バラカ)を付与され、(2)それを証明するのは、難病の治癒や未来の予言など、他の者には成しえない奇蹟的な所業であり、(3)その聖者のもとには、彼とのかかわりを通じてアッラーの恩寵を受けられると考える人々がやってきて、アッラーへの「とりなし」を願う、という点に一致する。

しかし、聖者信仰の研究が示す第四の点、「聖者がアッラーから授けられた恩寵はその持ち物や墓などに宿り、人々に力を与えると考えられている」という点に、ジェンネのalfaは必ずしもあてはまらない。儀礼でalfaが人々の衣服・持ち物に触れたり唾を吹きかけたりする所作は、接触によってalfaに宿る力を伝えていると考えられるため一致するが、ジェンネでalfaの墓が参詣の対象になることはない。ジェンネにも過去の「聖者」が埋葬されている墓は六〇ていど存在するが⁽¹⁶⁾ [Diakie 2001:57]、そこは参詣や祈願の場ではない。人々が悩みや病を抱えたときに訪ねるのは、聖者の墓ではなく生きているalfaのものである。また、大多数のalfaは亡くなるalfadeない住民と同じく町の北側(外部)にある墓地に埋葬される。死してなお(多くの場合には死後にこそ)信仰の対象になる他地域の聖者に比べて、ジェンネのalfaの役割はより「現世的」である。

alfaは人生儀礼や学校、日常生活のあらゆる場において必要不可欠とされている。その役割から、彼らはジェンネの社会における「司祭」であり、教師であり、世話役、占い師、医者、カウンセラーで

ある、ともいえよう。もちろんジェンネの人々にとってalfaはどのような役割を果たすときでも「alfa」であって、彼ら自身がこうした呼称を用いているわけではない。しかし、ジェンネで人々に職業を尋ねると、漁師である、米を作っている、機織りである、といった返答と同じように、「私の職業はalfaである」という返答がなされる。alfaの「現世的」な特徴は、この点からも明らかである。

ジェンネの場合、誰がalfaであるか、また自身がalfaであるか否かは、人々の漠然とした総意から導き出される。あの人はイスラームの知識をもち非常に敬虔である、彼には恩寵が授けられているだろう、という認識が、彼をalfaと呼ばれる存在にするのだ。二二でalfaとそうでないものを分けるのは、聖／俗のあいだの線引きではなく、他の者に比べてどの程度イスラームの知識をもっているのか、どれほど「よきムスリム」であるかという、相対的な度合の高低である。

モロッコのイスラームを研究する堀内は、「暫定的に」としながらも、「聖者」という語に関してある提案をおこなっている。それは、「聖者」を「より穏当な「偉人」という語」で称する、というものである [堀内 1999:319,323]。この提案は、本論の冒頭でも述べた、キリスト教における「聖者(saint)」という語がその差異を無視してイスラームへ転用されたことから生じる問題を解消するために提示されている。

「偉人」という語は、「聖」であるか否かを区分するカテゴリーを想定させず、相対的な度合が判断基準となっている。その点で、ジェンネのalfaを解釈するうえでも有効な語であろう。「聖」という語

を用いないことで、これまでみてきた *alīa* の現世的な側面や、人々の評価によって変化する *alīa* の位置づけも説明可能になる。しかしさらに言えば、ジェンネにおいて *alīa* が求められる機会は、一般的に抱かれるであろう「偉人」のイメージのそれよりも頻繁で、人々の日常生活の遍在している。聖者を偉人と呼び代える堀内の提案をジェンネの *alīa* の現状に沿って展開させるならば、*alīa* はジェンネの人々にとって、「学識者」「教師」「医者」「師」などの意味も含意する、日本語の「先生」のような存在であると言うこともできよう。

alīa は、これまでのイスラーム聖者研究における「聖者」の範疇と一致する部分をもちながらも、その「現世性」「日常性」の強さから、「聖者」と表現するには合理的と言いつても難しい側面ももっている。*alīa* のこうした位置づけは、これまでのイスラーム研究において「聖者」と呼ばれてきた人々を成り立たせる、かれらが生きられているローカル・コンテクストの重要性を示唆している。

註

¹ たとえば第一〇第二六節では、以下のように言及されている。「『見なさい。アッラーの友(ワリー)には本当に恐れもなく、憂いもないであろう』……『これらの人々は誰で、どんな種類の人間なのか』という問いに対しては、『すべてを神に捧げ、常人に勝る信仰を有し、その信仰の度合いによって、諸々の奇蹟を現す力を与えられた人々である』という答えが返される」[日本ムスリム協会編 1983:254]。

² イスラームの諸相を、イスラーム法学者などのイスラームの知識人によって担われる「イスラーム文明 (Islamic Civilization)」と、イスラームを信

仰する大衆によって担われる複数の「地域文化 (local cultures)」に区分し [von Grunebaum 1955:28-31]、その後者に聖者の実践や聖者信仰を位置づける見方は、一九七〇年代頃まで聖者研究の分析枠組みとして用いられていた。ヴァールデンブルグはグリユネバウムを踏襲し、「公的イスラーム」と「民衆イスラーム」という語で区分している [Wardenburg 1978]。

一九八〇年代にはいり、この二項対立に通時的な視点をとりいれることで、両者のあいだの歴史的なダイナミズムも説明可能にしたのがゲルナーである [Gelner 1981]。ゲルナーによると、イスラームの在りかたは、「コミュニティ」へ規範を与える・正当性の判定者であるウラママーに依拠した厳格な一神教的極と、その「オルタナティブ」である、聖者(マラーブ)に依拠したゆるやかな方向へと向かう極のあいだを、振り子のように動くものだという。ゲルナーはモロッコやチュニジアの事例をもとに、この振り子は社会が革命時や危機的状況にあるときは一神教的な極に、平穏なときにはもう一方の極に振れると指摘している [ibid.:721, 159]。

³ アフリカのイスラームについて研究した V・モンティユは、これにさらに、「アラビア語の識字がある」とこと「なんらかの教団に属している」とも加えている。しかし、これは一部のスーフイズムにおける聖者研究を前提としたものであり、一九八〇年代以降の複数のローカル・コンテクストにおける聖者像とはかならずしも一致しない。

⁴ 本論におけるジェンネについての記述は、二〇〇七年二月から二〇〇八年一月までのジェンネにおけるフィールドワークにもとづいている。

⁵ ジェンネには一〇以上の異なるエスニック・グループが共存している。異なるエスニック・グループのあいだでは、町の共通語としてソングアイ語が話されている。ソングアイ語は、マリ国内では北部地域の人々を中心に用いられている。各地域によって発音や語彙に違いがあるため、ソングアイ語の話者は、トンプクトゥ周辺で話されるものを「コイラ・チニ (koyra chini)」¹、ガオのそれを「コロボロ・チニ (koroboro chini)」²、ジェンネのそれを「ジ

エンネ・チニ (djenné chinini) (chininiは言語「ことばの意」と呼んで区別している。それにしたがって、本稿ではソンガイ語のジェンネ方言をジェンネ語と表記する。

。筆者がジェンネの住民に「alfaとは何であるか」と問うと、彼／彼女が一定のフランス語を理解する者(学校の教師など)ならば「alfaはsain(聖者)である」という答えが返ってくる。コーラン学校に通いアラビア語の識字がある者は「それはmarabout(マラブー、北アフリカにおける「聖者」のフランス語表現)である」と答え、それぞれ中東とエジプトでイスラーム諸学問を修めた二人のalfaは、「それはジェンネのwallといえる」と説明した。

⁷ 一八世紀頃のジェンネのイスラーム知識人は、交易と学術の交流で密接なかわりのあるトンブクトゥと同じく、多くがカーディリー教(Qadiriyya)で学んでいた[Cuoq 1984:185]。西アフリカにカーディリー教団のスーフイズムが伝えられたのは一五世紀後半のことで、サハラ砂漠に居住しアラビア語を話すKunta(クンタ)と呼ばれる集団を通じてもたらされた〔大塚・小杉他編 2002:350〕。トンブクトゥやジェンネではカーディリー教団がもたらされた後も、それが「組織としての力をほとんどもたない」ほどゆるやかな実践がつづいていた〔大塚 1999:367〕。トンブクトゥではその後の一八世紀末に、クンタの出のスイーディー・ムスタールがカーディリー教団の組織化を徹底し、教団のネットワークを緊密にした。ジェンネにおけるスイーディー・ムスタールの影響は定かではないが、その人的交流の活発さから、ジェンネにも彼の影響がもたらされていたと考えられよう。

一九世紀前半にジハード国家を興すセク・アマドゥは、ジハードを起こす前に、ジェンネやトンブクトゥのカーディリー教団のもとでも学んでいる。しかし武力よりも学問的手段でイスラームを強化すべきであるというクンタ系のカーディリー教団に反発し、教団とは対立した〔ibid.:367-368〕。

⁸ コイラ・ココイは現在の行政上の首長(ジェンネ市長)とは異なるものの、町の行政上の決定や町全体で討議すべき問題の裁定に大きく関与し、強

い影響力をもっている。町の興り以降、代々ソンガイのMaiga家から輩出されている。

⁹ sir alfa以外のalfaは、さらに「buyana alfa(バイヤナ・アルファ)」と「kiao alfa(キタオ・アルファ)」の二つに分けられる。buyana alfaはジェンネ語で「知識を進展させるalfa」を意味し、コーランの読み書きを教えることのできるalfaのことだという。もう一方のkiao alfaは、ハディースを教えることができる、さらによくコーラン学校で知識を得たalfaである。ハディースとはアラビア語で「話」「伝承」などの原義をもち、イスラームでは転じて預言者ムハンマドの言行を記録したものを意味する。

¹⁰ ジェンネのコーラン学校に通う子ども的人数にかんする統計資料はないが、ジェンネのコーラン学校の教師で組織するアンシエーションの代表によれば、一校当たりの生徒数の平均は四五人ていどだという。また、フランス語とアラビア語でイスラーム教育をおこなうメデルサといわれる学校もジェンネに二校あり、その生徒の合計は一九一人である〔CAP 2005〕。これをもとに計算すると、ジェンネでコーラン学校とメデルサに通う生徒は二七五六人にのぼる。これは、コーラン学校に通うのとはほぼ同じ年代(五〜一四歳の人口三五一五人)の約七八・八%にあたる〔DNuH 2005:21〕。また、ジェンネに六校ある小学校(六、七歳から通い始め順調に進級すれば一二、三歳頃に修了)の生徒数三三三一人の約八三・一%である〔CAP 2005〕。

¹¹ 西アフリカのイスラーム学問の中心地であるジェンネの高等コーラン学校で指導を受けようと、ジェンネの町の外からやってくる者も多い。たとえばジェンネでは「由緒ある」alfaの家系と言われているテラ家の高等コーラン学校では、二〇人が首都バマコや隣国ブルキナ・ファソ、コート・ジボワールなどのジェンネ外からやってくる。テラ家のalfaのひとりであるブバカル・テラの話によれば、彼が子供だったころ(約三〇年前)には、同じくalfaであった彼の父のもとで一〇〇人以上の他所からやって来た生徒がいたという。

12 11)で現在のジェンネの alfa (とくにコーラン学校の教師をつとめる bayyana alfa) (kiao alfa) がイスラームのどの宗派に属するのか、という問題について言及しておきたい。ジェンネの alfa に宗派や帰属している教団は何かと尋ねると、「特にない」という返答か、彼が長年付いて学んだ alfa の名前が挙げられる。特定の派の名前を挙げる alfa も数名いたが、彼らはいずれも若い頃に中東やエジプトなどの外国に留学した経験をもっていた。現在のジェンネにおいてどの宗派かという問題は重要視されておらず、alfa のあいだでも住民のあいだでも、この違いで問題が生じるといったことは見られない。

また、alfa のあいだで中東というイスラームの「中心地」で学んだ経験があることが必ずしも高く評価されるわけではなく、「一度も他所で学んだことがなくジェンネでずっと学んできた」ことが、時に誇らしさをもって語られる。これは、ジェンネの alfa が彼らの町のイスラーム学術都市としての充実を自負しているからであろう。

13 一万五千セーフア・フランは日本円にして三千七百円でいど。ジェンネの物価の目安としては、洗濯固形石鹸が一二五、パンが一本百、工場製のプリント綿布(約一・三mで女性の巻スカート一着分)が千六百セーフア・フランである。収入例としては、大工などの熟練労働者の親方で一日二千セーフア・フラン。毎日現金収入が見込めるわけではない生業の場合、一万五千セーフア・フランは決して安くはない。

14 干ばつ時のそうした経験をふまえ、今日では、alfa のアソシエーションや各街区の代表者らが、干ばつ以前の高いままに保たれている「相場」の引き下げについて話し合ったり、一九九〇年代後半からは女性のアソシエーションが講をつくって、儀礼に必要な資金をやりくりしたりしている。

15 siri alfa のなかには、一年のうち何ヶ月かを、より「客」の多い首都で過ごす者もいる。首都に住む親族や知り合いの家を拠点に、彼の評判を聞いてやってきた人々の相談にのるといふ。

16 D・ジャキテは、ジェンネ内にある「聖者 (saints) の墓」を記した町の地図を作製している。ここに記載された墓すべてがかならずしもイスラームの聖人のものでなく、現在のジェンネの町を築くときに土地の精霊を鎮めるため人身御供として生き埋めにされたといわれる女性タバマ・ジェネボの墓も含まれている [Diakité 2000]。

参考文献

- 赤堀雅幸 2005 「スーフイズム・聖者信仰複合への視線」赤堀雅幸他編『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会、pp.1-19。
ウイルソン、B. 1972 『セクターその宗教社会学』池田昭訳、平凡社。
加賀谷寛 1982 「南アジアにおける民衆宗教スーフイズム」中牧弘允編『神々の相克 文化接触と土着主義』新泉社、pp.141-169。
大塚和夫 1989 『異文化としてのイスラーム』同文館。
大塚和夫 1999 「イスラームのアフリカ」樺山紘一他編『世界の歴史 24 アフリカの民族と社会』中央公論社、pp.285-476。
大塚和夫、小杉泰他編 2002 『岩波イスラーム事典』岩波書店。
鷹木恵子 2000 『北アフリカのイスラーム聖者信仰』刀水書房。
ターナー、ブライアン 1994 『ウェーバーとイスラーム』香西純一他訳、第三書館。
日本ムスリム協会編 1983 『日亜対訳注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会。
ニコルソン、R.A. 1980 『イスラームの神秘主義』中村廣治郎訳、東京新聞出版局。
堀内正樹 1985 「モロッコのイスラーム—聖者信仰の概要と事例」『民族学研究』50(3):322-332。
堀内正樹 1999 「現代モロッコの廟参詣」歴史学研究会編『地中海世界史 4 巡礼と民衆信仰』青木書店。

参考文献

- Akhmisse, M. 2000 "Les marabouts guérisseurs" Mustapha Akhmissse ed., *Médecine, magie et sorcellerie au Maroc ou l'art traditionnel de guérir*, Dar Koroba, pp.27-37.
- Bâ, Amadou H. et J. Daget 1962 *L'empire peul du Macina*, Mouton.
- CAP (Centre d'animation pédagogique de Djenné) 2005 *Rapport sur la situation pédagogique de Djenné* (Unpublished Paper).
- Clark, Peter B. 1982 *West Africa and Islam*, Edward Arnold.
- Cuoq, Joseph 1984 *Histoire de l'islamisation de l'Afrique de l'Ouest*, Paul Geuthner.
- Diakité, Drissa 2002 "L'Islam à Djenné" J. Brunet-Jailly ed., *Djenné d'hier à demain*, Editions Domnîya, pp.45-59.
- DNUH (Direction Nationale de l'Urbanisme et de l'Habitat) 1998 *Schéma directeur d'urbanisme de la ville de Djenné et environs*, DNUH.
- DNUH 2005 *Schéma directeur d'urbanisme de la ville de Djenné et environs (1^{ère} version)*, DNUH.
- Douté, Edmond 1900 *Note sur l'islam maghrébin*, Leneux.
- Eickelman, Dale 1976 *Moroccan Islam*, University of Texas Press.
- Es-Sa'di, Abderrahman ben Abdallah ben Innan ben Amir 1964 *Turikh es-Soudan*, (traduit de l'arabe en français par O. Houdas), Adrien-Maisonneuve.
- Fischer, Humphrey 1973 "Conversion Reconsidered: Some Historical Aspects of Religious Conversion in Black Africa" *Africa* 43(1):27-40.
- Geertz, Clifford 1968 *Islam Observed: Religious Development in Morocco and Indonesia*, The University of Chicago Press.
- Gellner, Ernest 1981 *Muslim Society*, Cambridge University Press.
- von Grunebaum, GE. 1955 *Unity and Variety in Muslim Civilization*, The University of Chicago Press.
- Johnson, Marion 1976 "The Economic Foundation of An Islamic Theocracy—The Case of Masina", *Journal of African History* 17(4):481-495.
- Konaré Ba, Adame 2002 "Djenné, des origins à la pénétration coloniale, un aperçu historique" J. Brunet-Jailly ed., *Djenné d'hier à demain*, Editions Domnîya, pp.27-44.
- Lane, E.W. 1978 *Manners and Customs of the Modern Egyptians*, East-West Publications.
- Le Tourneau, Roger 1954 "L'Islam Nord-Africain", *Annales de l'Institut d'Etudes Orientales d'Alger* XV:183-214.
- Martin, R., ed. 1982 *Islam in Local Context*, EJ Brill,
- McIntosh, Roderick J. and Susan Keech McIntosh 1981 "The Inland Neger Delta before the Empire of Mali: Evidence from Jenne-Jeno", *Journal of African History* 22(1):1-2.
- McIntosh, R.J 2002 "L'origine de Djenné d'après les traces archéologiques", J. Brunet-Jailly ed., *Djenné d'hier à demain*, Editions Domnîya, pp.7-26.
- Monteil, Charles 1971(1932) *Une cité soudanaise Djenné*, Editions Anthropos.
- Munson, Henry 1993 *Religion and Power in Morocco*, Yale University Press.
- Shimmel, Annemarie 1975 *Mystical Dimensions of Islam*, University of North Carolina Press.
- Smith, Margaret 1928 *Rāḥi 'a the Mystic and Her Fellow-Saints in Islam*, Cambridge University Press.
- Tuner, Bryan S. 1974 *Weber and Islam*, Routledge.
- Van der Veer, Peter 1992 "Praying or Praying: A Sufi Saint's Day in Surat", *The Journal of Asian Studies* 51(3):545-564.
- Waardenburg, Jaques 1978 "Official and Popular Religion in Islam", *Social Compass* XXV 3-4: 315-431.

Reconsideration of the Concept of Islamic “Saints” with a Case of *alfa* in Djenné, Mali

ITO Miku

In the many parts of Islamic world there are people who are considered to have special power given by Allah. Muslims respect and call them in their local appellations. Studies of Islamic “Saints” have enclosed such people as “Saints” irrespective of their local variation. As the term of “Saints” has its origin in the Christianity, validity of its appropriation to Islamic practices has been discussed.

This paper presents a reconsideration of the term and concept of Islamic Saints with a case of *alfa* in Djenné, West Africa. Djenné is one of Islamic study centers in Sub-Saharan Africa and there are many people who are called *alfa*. Alfas being considered to have special power given by Allah, they play important role in people’s every-day life and life cycle as teacher of Koranic school, local Islamic leader, maker of talisman, predictor, traditional medical doctor and so on. We can find some common aspects to other Islamic “saints” in their roles in the society of Djenné. But their relation with people seems more “secular.”

Such roles and activities of *alfa* in Djenné rouse the importance of focusing on the local context in the studies and discussion on “Islamic Saints.”

Keyword:Islam, Saint, West Africa, Mali, Djenné